〈青森県史〉の窓 41

厄年にまつわる習俗

清野　耕司
（県民生活文化課
県史編さんグループ　主幹）

村社でのジェンコまき（平成14年／むつ市川内町桧川）

災厄や災難を受けやすいと信じられ、慎み深くするべきだとされる、数え年による特定の年齢を厄年という。厄年は、中国に発した陰陽道（おんようどう・おんみょうどう）の説として、平安時代には公家社会でもてはやされ、後に武家社会を経て民間にも広まったとされる。現代社会においても、便利な世の中になったとはいえ、交通事故や自然災害、種々の社会問題など「厄」の領域は拡大しており、厄年は巨大な俗信の一つとなっている。

特に男性の42歳と女性の33歳は大厄とされ、前厄・本厄・後厄の三年間は忌み慎むということが多い。他に男性の25歳と女性の19歳も全国的に共通している。また、青森県の下北地方では、男性は2・5・8がつく年齢、女性は3・7・9がつく年齢が厄年と説明する人もいるように、全国各地に伝わる厄年の年齢は多様である。厄年の年齢は、もともと十二支と関連があり、生まれ年の干支が巡ってくる年に、それまで付着した厄やけがれを払い、疲弊したり衰弱したりした生命力を更新するというものであったらしい。

さて、人々は厄年にあたり、どのように厄を避けてきたのか。厄払い・厄落とし・厄除けなどと呼ばれる呪的行為を中心とした儀礼や行事が、現在でも行われ、人々の関心も高い。一般的に行われていたのは、大晦日や節分などに、自分が常に身につけているもの、例えば櫛（くし）・手ぬぐい・銭などを道辺などに落としてくるというものである。近所の人や親戚を招いて、ごちそうを振る舞うことも行われた。また、2月1日に改めて門松を立てたり、雑煮を食べたりする「年重ね」は、二度の正月支度によって、一ヶ月ほどの間にさっさと厄年を送ってしまおうとするものであった。

下北地方では、佐井村原田で、厄年の人が元日の朝に神社にお参りし、お供えをあげ、皆に厄を拾ってもらうといって、年の数だけ拝殿の中で銭をまく。それを近所の子供たちが拾いに来るという。サントシと呼ばれる2月1日の早朝に、銭ではなく細かく切った餅をまいたという人もいる。サントシの年越しである1月の晦日（みそか）に、親戚などを呼んで宴をひらいたという話もよく聞く。最近の傾向としては、厄年の人たちが合同で、地区の神社などで厄払いをし、同窓会を兼ねた宴会を催すところも多い。佐井村で、正月や小正月のしめ縄や飾り物を、厄年の人がいる家では2月1日までおろさない、というのは、「年重ね」と関係がありそうである。そもそも青森県でよくいうサントシ（小正月も加えて三度目の年とりの意か）が「年重ね」としての二度目の正月に由来するものと考えられるが確証はない。

青森県に限ったことではないが、行事内容や習俗そのものが変容しても、「厄」を回避したいという思いは、いつの時代も変わらず、特に正月や節分のころに、厄落としの儀礼が今でも行われているのである。